第五章　夕霧の物語　幼恋の物語

［第一段　夕霧と雲居雁の恋の煩悶］

「いとど文なども通はむことのかたきなめり(今後はいっそう手紙を取り通わす事も難しくなるだろう)」と思ふに(と思うと)、いと嘆かしう(若君はとても悲しく)、物参りなどしたまへど(宮が食事を差し上げなさっても)、さらに参らで(少しも召し上がらず)、寝たまひぬるやうなれど(寝入りなさった様に横にお成りでも)、心も空にて(心は上の空で)、人静まるほどに(女房たちが寝入った頃の夜中に)、中障子を引けど(姫の居間との間の襖戸を引いても)、例はことに鎖し固めなどもせぬを(いつもは特に錠を鎖していないのに)、つと鎖して(堅く錠を下ろしてあって)、人の音もせず(物音もしない)。

いと心細くおぼえて(若君はひどく心細くお思いになって)、障子に寄りかかりてゐたまへるに(襖に寄り掛かって座っていらっしゃると)、女君も目を覚まして(姫君も目を覚まして)、風の音の竹に待ちとられて(風が庭の笹を揺らして鳴り静まりながら)、うちそよめくに(そっと吹く中に)、*雁の鳴きわたる声の(雁が鳴きながら飛んで行く声が)、ほのかに聞こゆるに(遠くに聞こえるのを)、幼き心地にも(子供心にも)、とかく思し乱るるにや(物寂しくお思いになったのか)、
*「かり」は大辞泉に＜《鳴き声から》ガンの別名。＞とある。「ガン」は＜カモ目カモ科の鳥のうち、ハクチョウ類を除いた大形のものの総称。雌雄同色で、羽色は一般に地味な褐色。草食性。多くは北半球の北部で繁殖し、日本にはマガン・ヒシクイなどが冬鳥として渡来、湖・沼・湿地・水田などでみられる。V 字形や横 1 列の編隊を組んで飛ぶ。かり。かたいとどり。《季 秋》＞とある。場面は晩秋である。

「*雲居の雁もわがごとや(空を飛び渡る雁も私と同じ気持ちのように悲しい声で鳴いている)」
*「くもゐ」は雲の居る所だから＜大空＞を意味するが、高い所ということから「雲上人」ともあるように＜宮中・禁中＞のことともあり、より広く＜みやこ＞を意味するとも大辞泉にある。なお、注には＜雲居雁の詞。その呼称の由来となる。「霧深く雲居の雁もわがごとや晴れせずものは悲しかるらむ」（源氏釈所引、出典未詳）による。『奥入』は「霧深き」「晴れせずものの」とある。＞とある。姫君が「幼き心地に」呟いたのなら、「雲居」は＜大空＞のことで、雁の声が悲しげに聞こえた、のだろうとは思う。しかし参照歌は、表意でも＜雲の中に居る雁は私と同じように霧が晴れない所為か悲しそうに鳴いて行く＞と恋路を邪魔された悲しさを詠んでいるし、複意では「私」と同勢力の「雁」が策略に苦戦しているという戦況報告ないし認識にさえ見える。また参照歌では「悲しかるらむ」とある雁の鳴き声だが、特徴の有る鳴き声ということで「雁が音」は、その「カリガネ」という読みがガンの別名ともなっているとのこと。そして、雁の鳴き声を音声ファイルで確認しようと「雁の鳴き声」で Web 検索すると、目ぼしい物は幾つか見つかるが、その目当ての他に「雁」や「雁がね」を詠んだ歌が相当数有るようで、意外にも多くの和歌の解説ページがヒットする。その幾つかを流し見るうちに、少し気になる歌があった。それは万葉集の巻九にある「弓削皇子に献る歌三首(ゆげのみこにたてまつるうたさんしゅ、但し詠み手が柿本人麻呂という有名な歌人なのか其に代表される側近一派なのか其の他なのかは私には分からない)」と題詞された、1701・1702・1703 番の三首全てが雁にまつわる歌である。「弓削皇子」は持統女帝の御世の後継者混乱期の政争で敗退し 20 代半ば過ぎで亡くなった、持統とは別腹の天武天皇の第 9 皇子、とのこと。私はこの辺りの複雑な事情には暗いが、雁は北方からの越冬渡り鳥なので、「雁」が「外国」ないし「援軍」を意味するという解釈は学説にもあるらしい。さてその「献る歌三首」の中でも、9-1702 番の「いもがあたり(妹があたり)しげきかりがね(繁き雁が音)ゆふぎりに(夕霧に)きなきてすぎぬ(来鳴き

て過ぎぬ)すべなきまでに(術無きまでに)」は特に興味深い。男が夕霧にまぎれて女の近くで盛んに誘いかけても応えが無いのでそれ以上はどうすることも出来ずに帰って行った、みたいな言い方だが、その有り触れた内容も雁が音の悲しさを思えば情感に浸れる、という事は確かに有るかも知れない。しかし是はわざわざ「弓削皇子に献る歌」なのだから、何らかの複意があると見るべきだろう。が其れは兎も角として、気になるのは「妹があたり」の「妹」である。というのも、弓削皇子が異母姉弟ないし兄妹の紀皇女(きのひめみこ)と恋仲なのは有名な話のようで、万葉集の巻二にも「弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首」と題詞されて 119〜122 番まで、一目惚れの動悸から憧れ、そして情欲から人妻になっても断ち切れない思いと、余りにも整然と掲載されていて、本当に皇子自身の歌なのか疑わしく思えるほどだが、この二人が「異母姉弟の恋」だったとは、いかにもネタバレだ。当時の読者にとって、弓削皇子と紀皇女の少しキナ臭い恋愛関係とその末路は常識だったのだろう。それで作者は、この姫君をして紀皇女を連想させる「雲居雁」という言葉で悲観論を云わせた、というワケだ。

と、独りごちたまふけはひ(と独り言なさる気配が)、若うらうたげなり(初々しくて可愛らしい)。いみじう心もとなければ(それを漏れ聞いた若君は姫を確かめたくて)、

「これ、開けさせたまへ(此処を開けて下さい)。小侍従やさぶらふ(小侍従は居ますか)」

とのたまへど(と仰るが)、音もせず(返事は有りません)。御乳母子なりけり(小侍従は姫君の乳母の娘なのです)。

独り言を聞きたまひけるも恥づかしうて(姫君は若君が自分の独り言をお聞きになったのも恥ずかしくて)、あいなく御顔も引き入れたまへど(きまり悪そうにお顔を布団に引き入れなさったが)、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや(若君の恋心が分からないでも無さそうな所はもう子供ではありません)。乳母たちなど近く臥して(乳母や他の女房たちが近くで寝ていて)、うちみじろくも苦しければ(体を動かす気配も気付かれたくないので)、かたみに音もせず(姫も小侍従も物音を立てません)。

「さ夜中に友呼びわたる雁が音に、うたて吹き添ふ荻の上風」(和歌 21-03)

「幼馴染みを呼ぶ声を、返す乾いた襖紙」(和歌 21-03)

*「さよなか」は＜真夜中＞のことで、特に歌の場合は語調を整える接頭語としての「さ」は珍しくも無いのかも知れない。しかし、この場面での「小夜中に」の詠い出しは、かの万葉集巻九にある「獻弓削皇子歌三首」の 1701 番の歌、「小夜中と夜は更けぬらし雁が音の聞こゆる空に月渡る見ゆ」を引き出さずには居られない。この参照歌の情景は正に＜月に雁がね＞だが、「小夜中と夜は更けぬらし」を＜世の中は静かに平定されたらしく＞と読んで、「雁が音の聞こゆる空に」を＜それを知らせる鐘が鳴り響いて＞と読み、「月渡る見ゆ」を＜朝廷の威光は揺ぎ無いと考えられる＞と読むような政治情勢の見聞に見えなくも無い。読み方は立場によって異なるかもしれないが、何らかの複意はありそうだ。ただし、この若君の歌には政治的な複意は感じられず、こういう万葉集の 9-1701 番に引っ掛けた詠み方をしたことで、姫君が暗意した弓削皇子と紀皇女との悲劇に若君も共感して憂いたという独詠歌ながら返歌の意図になっている、という作者の趣向なのだろう。多分、若君が言う「友」は姫君と小侍従の両方で、少なくともこの三人は幼馴染みで、まだ今ほどは女房たちの監視が厳しくない時に、深夜に若君を姫君の部屋に手引きしたのが小侍従だったらしいことが窺われる歌だ。しかし今夜は返事が無いまま、若君は自分が立てた襖の唐紙に擦れる袖の乾いた音が、まるで「おぎのうはかぜ」のように聞こえたのだろう。

「*身にしみけるかな(秋風が身に染みるなぁ)」と思ひ続けて(と若君は思い続けて)、宮の御前に帰りて嘆きがちなるも(大宮の母屋内の寝所に帰ってため息がちなのも)、「御目覚めてや聞かせたまふらむ(宮を起こし申しやしないだろうか)」とつつましく(と憚られて)、みじろき臥したまへり(物音を立てないように身をよじって横たわりなさいました)。　*注に<夕霧の心中。「吹きくれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな」（古今六帖一、秋の風）を踏まえる。>とある。

*あいなくもの恥づかしうて(翌朝、若君は気まずく何とも恥ずかしくて)、わが御方にとく出でて(自分のお部屋に早くから起き出て)、御文書きたまへれど(姫への恋文をお書きになったが)、小侍従もえ逢ひたまはず(友の小侍従にも会えず)、かの御方ざまにもえ行かず(姫のお部屋にはさらに行けず)、胸つぶれておぼえたまふ(途方に暮れなさいます)。　*注に<翌朝の夕霧。>とある。確かに、この物語における場面展開は分かり難い事が多い。

*女はた(姫のほうは)、騒がれたまひしことのみ恥づかしうて(二人の仲を騒がれた事だけが恥ずかしくて)、「わが身やいかがあらむ(自分の立場はどうなるのだろう)、人やいかが思はむ(世間はどう思うのだろう)」とも深く思し入れず(といったことは深く考え込みなさらず)、をかしうらうたげにて(明るく無邪気にしていて)、うち語らふさまなどを(周囲があれこれと取り沙汰するのを)、疎ましとも思ひ離れたまはざりけり(煩わしく思って遠ざけなさる事もありませんでした)。　*注に<「女君」の呼称から「女」と呼称。恋の場面が一層に盛り上がったことを意味する。>とある。確かに「女」の呼称は、多くの場合に濡れ場の描写かと思うが、此処は違う。むしろ作者は、普通の男女の描写の手順で話を進めることで、この姫君の幼さを表現しようとしている、ように見える。

また(とはいえ)、かう騒がるべきこととも思さざりけるを(これほど騒がれるような事ともお思いではなかったのに)、*御後見どももいみじう*あはめきこゆれば(大臣の言い付けに従う女房たちが厳しく注意申し上げるので)、え言も通はしたまはず(姫は文通もお出来になれません)。おとなびたる人や(世慣れた大人なら)、さるべき隙をも作り出づらむ(何とか文通する手立てを作り出すだろうが)、男君も(若君も)、今すこしものはかなき*年のほどにて(まだ幾らか経験不足なので)、ただいと口惜しとのみ思ふ(ただただ遣る瀬無いとばかりお思いです)。　*「おんうしろみども」の現代語への逐語訳は<お世話役の人たち>だが、その実体は側仕えの女房たち以外には有り得ないし、実際に此処の文の述語にも敬語表現は無い。しかし、そうすると女房を「御後見」としたのは言い間違いに見えてしまうが、作者は平然と書き進めている。ということは、この「御後見ども」という言葉は現代語には無い複合語法として読まざるを得ない。即ち、「御後見」は<内大臣の監督方針>であり、「ども」が<その指示を受けた女房たち>を意味する。　*「あはむ(淡む)」は<軽蔑的に非難する>。　*「年のほど」は注に<雲居雁十四歳、夕霧十二歳。>とある。此処までで姫君の年齢の明示は無いので、後述からの逆算なのだろう。

[第二段　内大臣、弘徽殿女御を退出させる]

大臣は(おとどは)、そのままに参りたまはず(それ以来は大宮邸にお見えにならず)、宮をいとつらしと思ひきこえたまふ(宮に重い責任が有ると思い申しなさいます)。*北の方には(でも、自邸の正夫人には)、かかることなむと(こうした事情は)、けしきも見せたてまつりたまはず(少しもお知らせなさらず)、ただおほかた(ただ全体の状況として)、いとむつかしき御けしきにて(実

に不満げな態度をお見せになって)、　*「北の方」とは、かつての右大臣藤原家の四の姫にして、弘徽殿女御の母君なる御方であり、また内大臣の自邸を舞台にした場面は初出かと思う。

「中宮の*よそほひことにて参りたまへるに(斎宮女御が中宮として立后式を挙げて皇后の御位にお就きに成ったので)、女御の世の中思ひしめりてものしたまふを(弘徽殿女御が御所での立場を嘆いて御出でなのが)、心苦しう胸いたきに(気になって仕方が無いので)、まかでさせたてまつりて(実家の当家に一度お下がり頂き申し上げて)、心やすくうち休ませたてまつらむ(ゆっくりお休み頂き申し上げたい)。さすがに(后でもないのに)、主上につとさぶらはせたまひて(帝にずっと側控えなさって)、夜昼おはしますめれば(一日中過ごされていては)、ある人びとも心ゆるびせず(仕える女房たちも気が休まらず)、苦しうのみわぶめるに(疲れてしまうばかりでしょうから)」　*「装い殊に」は注に＜『集成』は「いったん里邸に下がって、立后の宣命を受け、皇后としての威儀を整えて、あらためて宮中に入る」と注す。＞とある。つまりは、立后の儀式を挙げること、なのだろう。費用は後見者とは即ち光君持ちで相当な物入りだったらしい。

とのたまひて(と仰って)、にはかにまかでさせたてまつりたまふ(弘徽殿女御に急に里下がりして頂き申し上げます)。

御暇も許されがたきを(女御の里下がりは許され難かったが)、うち*むつかりたまて(大臣は愛娘が皇后に宣下なされなかったことを不満げに申し上げて)、主上はしぶしぶに思し召したるを(帝がしぶしぶにお思いだったのを)、しひて御迎へしたまふ(振り切って自邸にお迎えなさいます)。　*「むつかる」は今では＜子供が愚図る＞ような使い方だが、「うち」と強調して有るので相当強硬に抗議したのだろう。しかし、大臣が帝に抗議するからには、それ相応の建前を主張する必要はあるだろう。つまり、先に入内した弘徽殿が後入りの斎宮に遅れを取った事である。

「つれづれに思されむを(此処でする事も無く過ごすだけでは、退屈にお思いになるでしょうから)、姫君渡して(妹君を呼んで)、もろともに遊びなどしたまへ(一緒に遊びごとなどをおやりなさい)。宮に預けたてまつりたる(宮に養育をお預け申していて)、うしろやすけれど(安心ですが)、いと*さくじりおよすけたる人立ちまじりて(いやに世慣れて増せた者が友達にいて)、おのづから気近きも(いつのまにか感化されるのも)、あいなきほどになりにたればなむ(不都合な年齢になっているものですから)」　*「さくじる」は＜さしでる、利口ぶる＞と古語辞典にあり、また「さくじり」という名詞に＜こまっしゃくれ＞との説明もある。「およすく」は＜おとなびる、おとなぶる、老ける、じみになる＞など幅があるが、「人」を小侍従に想定すれば＜ませる＞だろう。注には＜『完訳』は「「人」は暗に夕霧。このあたり、内大臣の苦々しい口調」と注す。＞とあり、確かに読者にはその暗意が伝わる書き方だが、あくまで暗意であり、言い換えには小侍従あたりの姫君の遊び相手を想定する他は無いだろう。

と聞こえたまひて(と大臣は女御にお話しなさって)、にはかに渡しきこえたまふ(急に姫を大宮邸から大臣邸にお移し申しなさいます)。宮、いとあへなしと思して(宮はとても空しくお思いになって)、

「ひとりものせられし(たったひとり授かった)女(むすめ)亡くなりたまひてのち(お亡くなりになった後で)、いとさうざうしく心細かりしに(とても空しく寂しかった所に)、うれしうこの

君を得て(嬉しい事にこの姫君を得て)、生ける限りのかしづきものと思ひて(一生懸けて大事に育てるものと思って)、明け暮れにつけて(朝に晩に)、老いのむつかしさも慰めむとこそ思ひつれ(老いる気弱さも慰められようかと思っていたのに)、思ひのほかに隔てありて思しなすも(思いの他にあなたが私とは分かり合えないとお考えになるのも)、つらく(辛くて)」

など聞こえたまへば(など申しなされば)、うちかしこまりて(大臣は恐縮して)、

「心に飽かず思うたまへらるることは(納得出来ないと存じましたことは)、しかなむ思うたまへらるるとばかり聞こえさせしになむ(率直にそう存じられますと申し上げたまでのことです)。深く隔て思ひたまふることは(恨んで分かり合えないと存じまするることなどは)、いかでかはべらむ(どうして御座いましょう)。

内裏にさぶらふが(御所の女御が)、世の中恨めしげにて(処遇に不満そうで)、このころまかでてはべるに(このところ里下がりして居りまして)、いとつれづれに思ひて屈しはべれば(何かとつまらなさそうに元気を無くしておりますので)、心苦しう見たまふるを(気掛かりに存じまして)、もろともに遊びわざをもして慰めよと思うたまへてなむ(一緒に遊び事などをして慰めようと存じましたので)、*あからさまにものしはべるとて(ほんの少しの間だけ移すまでですので)、育み人となさせたまへるを(母上が娘を育てて一人前にして下さったご恩を)、おろかにはよも思ひきこえさせじ(決して疎かに思い申すことはありません)」　*「あからさま」は<ほんの少しの間>。「あかる」は「別る、開かる」が原義らしく、「赤る、明る」い「さま」は転義、とのこと。

と申したまへば(と申しなさると)、かう思し立ちにたれば(こうとお決めになったら)、止めきこえさせたまふとも(お止め申した所で)、思し返すべき御心ならぬに(お考え直すような大臣ではないので)、いと飽かず口惜しう思されて(宮はいつまでも残念にお思いになって)、

「人の心こそ憂きものはあれ(人の気持ちほど辛いものはありません)。とかく(何かと)幼き心どもにも(幼い子供たちにも)、われに隔てて疎ましかりけることよ(私に隠し事があって分からないものです)。また(でも)、さもこそあらめ(そうしたことなどは在りがちだろうに)、大臣の(大臣は)、ものの心を深う知りたまひながら(ものの道理を良くご存知でいながら)、われを怨じて(私を恨んで)、かく率て渡したまふこと(このように姫を連れて行ってしまいなさるとは)。かしこにて(あちらでは継母の北の方がいて)、これより*うしろやすきこともあらじ(此処より問題が無いということも無いでしょうよ)」　*注に<継母のもとに引き取られることになるからである。>とある。尤もである。だからこそ、大臣は「わかむどほり腹」の娘を大宮に預けたのだろう。大臣の藤原家当主としての立場も分かるが、此処に示された通りの、大臣が当初は入内など念頭に無いままに、でなければ出自に厳格な后候補者を自邸で育てない筈は無く、継母継子の面倒を大臣は嫌ったと共に、上流夫人の仕付けには打って付けの宮筋であり、娘を亡くして寂しがっていた母への孝行も兼ねて、大宮に姫君の養育を任せた経緯を思えば、若君と姫君との仲が「さもこそあらめ」と言い放つ、この大宮の弁は説得力がある。何しろ、大臣は摂関家を目指すという藤原家の立場も然りながら、今になってこの姫の入内にこだわって二人の仲を裂こうとする動機に付いては、既に第三章第六段で「殿の御仲の、おほかたには昔も今もいとよくおはしながら、かやうの方にては、挑みきこえたまひし名残も思し出でて、心憂ければ、寝覚がちにて明かしたまふ。」と、弘徽殿女御の立后を阻んだ光君への対抗心から意固地になっていることが、暴露されているのだから。

と、うち泣きつつのたまふ（泣きながら側近の女房に仰います）。

［第三段　夕霧、大宮邸に参上］

折しも冠者の君参りたまへり（其処へ丁度、若君が遣って来なさいました）。「もしいささかの隙もや（少しでも姫に会える機会がないものか）」と、このころはしげう*ほのめきたまふなりけり（最近は頻繁に立ち寄りなさっていました）。内大臣の御車のあれば（しかし、内大臣の御車が玄関先に止めてあったので）、心の鬼にはしたなくて（自戒の無さに端無くて）、やをら隠れて（そっと隠れて）、わが御方に入りゐたまへり（大宮の母屋の御簾内の自分の部屋に入り込みなさいました）。　*「ほのめく」は＜ちょっと顔を出す、軽く立ち寄る＞。

*内大殿の君達（うちのおほとののきんだち、内大臣家の子息たちの）、左少将（させうしゃう、左近衛府次官）、少納言（せうなごん、参議補佐）、兵衛佐（ひゃうゑのすけ、兵衛府次官）、侍従（じじゅう、天皇護衛）、大夫（たいふ、御所用人）などいふも、皆ここには参り集ひたれど（皆、大宮邸には参って集まったが）、御簾の内は許したまはず（大宮の母屋の中に入る事は許されなさっていませんでした）。　*この内大臣の子息たちについて、注は＜左少将は正五位下、少納言は従五位下、兵衛佐は従五位上、侍従は従五位下相当官。大夫は五位の意だから従五位下、官職の有無は不明。＞とある。官位相当制による位階の表し方、ということか。とにかく、実務職を超えた特権階級の人々である。

*左兵衛督（さひゃうゑのかみ、左兵衛府長官）、権中納言（ごんちゅうなごん、特任議長）なども、異御腹（ことおんはら、大宮腹ではない大臣の異母兄弟）なれど、故殿の御もてなしのままに（故太政大臣が正妻であり故桐壺院の妹宮である大宮を公式の母君として敬うようにとの御習わしのままに）、今も参り仕うまつりたまふことねむごろなれば（今もご挨拶を欠かさずに御出でなので）、その御子どももさまざま参りたまへど（その御子息たちもそれぞれこの屋敷に参りなさるが）、この君に似る*にほひなく見ゆ（源氏の若君ほどの気品はありません）。　*注に＜内大臣の異母兄弟たち。左兵衛督は従五位上、権中納言は従三位相当官。なお、「左兵衛督」は大島本の独自異文。他の青表紙本の多くは「左衛門督」とある。＞とある。　*「にほひ」は＜立ち上がる気品、見映え＞。

大宮の御心ざしも（大宮の若君に向ける御愛情も）、なずらひなく思したるを（比類なくお思いでしたが）、ただこの姫君をぞ（その他にはただこの姫君だけを）、気近うらうたきものと思しかしづきて（親しんで可愛く思って大事に御育てになり）、御かたはらさけず（御側から遠ざけず）、うつくしきものに思したりつるを（いつも見守っていたいとお思いであったのを）、かくて渡りたまひなむが（こうしてお移りになってしまうのが）、いとさうざうしきことを思す（とても寂しいこととお思いになります）。

殿は（当主の内大臣は）、「今のほどに（これから）、内裏に参りはべりて（御所に参りまして）、夕つ方迎へに参りはべらむ（夕方に姫を迎えに参ります）」とて、出でたまひぬ（邸を後にされました）。

「いふかひなきことを(言って無かったことに出来るものでもないので)、なだらかに言ひなして(二人の仲を穏便にまとめて)、さてもやあらまし(一緒にさせようか)」と思せど(とお思いになるが)、なほ、いと心やましければ(やはり大臣は厭な思いが勝って)、

「人の御ほどのすこしものものしくなりなむに(若君の位がもう少し一人前になってから)、かたはならず見なして(不足無い相手と見なして)、そのほど(その時に)、心ざしの深さ浅さのおもむきをも見定めて(思いの深さ浅さの意向を確かめて)、許すとも(結婚を許すにしても)、ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ(娘の格式を守るために済し崩しではなく世間にお披露目できるように、改めて正式の通い婚の形を踏ませなければならない)。

制し諌むとも(厳しく言っても)、一所にては(一緒に居たのでは)、幼き心のままに(欲情のままに)、見苦しうこそあらめ(子供を作ってしまうかもしれない)。宮も(宮もこの様子では)、よもあながちに制したまふことあらじ(とても強く二人を抑えなさることも無いだろう)」

と思せば(とお考えになるので)、女御の御つれづれにことつけて(女御のお相手にという言い方で)、ここにもかしこにもおいらかに言ひなして(此処にも彼処にも穏便に理由を付けて)、渡したまふなりけり(姫をお移しなさったのです)。

[第四段　夕霧と雲居雁のわずかの逢瀬]

宮の御文にて(夕方に大臣が迎えに来る前に、宮は姫にお手紙で)、

「大臣こそ(おとどこそ)、恨みもしたまはめ(私を恨みもしなさるようですが)、君は(あなたは)、さりとも心ざしのほども知りたまふらむ(別れることになっても私の気持ちの深さをご存知でしょう)。渡りて見えたまへ(部屋に来て顔を見せてください)」

と聞こえたまへれば(とお伝えなされば)、いとをかしげにひきつくろひて渡りたまへり(お出掛け用にきれいに着飾って姫が大宮の部屋に遣っていらっしゃいました)。*十四になむおはしける(十四歳にお成りでした)。*かたなりに見えたまへど(未成熟に見えなさるが)、いと*子めかしう(そのあどけなくて)、*しめやかに(神妙な面持ちが)、うつくしきさましたまへり(美しい姿をしていらっしゃいました)。　*此処に初めて、姫の年齢の明示である。　*「片生り」は＜半人前、未成熟＞とある。　*「こめかし」は＜子供っぽい、あどけない、おっとりしている＞とある。「かたなりに見えたまへど」の逆接は「うつくしきさま」に繋がって、此処は「かたなり」の修辞らしい。　*「しめやか」は＜しっとり落ち着いている＞または＜しみじみしている＞とあるが、この姫に物憂い印象は無いので、此処はいつもと違った別れの場面に緊張して＜神妙にしている＞のだと思う。

「かたはらさけたてまつらず(身近で御育て申して)、明け暮れのもてあそびものに思ひきこえつるを(明け暮れに成長を楽しみに思い申してきましたのに)、いとさうざうしくもあるべきかな(お別れするとは本当に寂しくてなりません)。残りすくなき齢のほどにて(残り少ない余命なので)、御ありさまを見果つまじきことと(あなたのご将来を見届けられないだろうと)、命をこそ思ひつれ(覚悟はしておりましたが)、今さらに(今のうちから)見捨てて移ろひたまふや(私と別れてお移りになるのが)、いづちならむと思へば(どんな所なのかと思えば)、いとこそ*あはれな

れ（とても心配になります）」　＊「あはれ」は注に＜『集成』は「自分の存命仲に引き離されて行く先が、継母のもとであることをあわれむ」と注す。＞とある。

　とて泣きたまふ（と言って大宮は泣きなさいます）。姫君は、＊恥づかしきことを思せば（ご自分と若君との仲が取り沙汰されている事のきまり悪さをお思いになると）、顔ももたげたまはで（顔も上げることがお出来になれずに）、ただ泣きにのみ泣きたまふ。　＊「はづかしきこと」は＜きまりわるさ＞だが、姫は基本的に若君との恋を少しも悪いと思っては居ないし、大宮の考え方の所為も有ってか、大臣の言う具合の悪さも理解していないようなので、宮や大臣や取り巻きに気後れするとか申し訳ないという気持ちではなく、自分の事が話題になっていること自体の晴れがましさがむず痒く、上がって気恥ずかしいのである。自己の客観的評価を気にするのは大人としての社会性である。ただ、それを恐れ過ぎるのは経験不足かもしれない。だから「泣きに泣く」のも別れの感傷であって、自責の念ではない。大人気ないともいえるが、やはり初々しくて可愛らしい。十四歳は当時でも今でも、もうあどけない年齢ではないだろうが、ここは素直に読んで置く。

　男君の御乳母、宰相の君出で来て、

「＊同じ君とこそ頼みきこえさせつれ（姫君は若君と同格なので結ばれるお方に違いないとご期待申し上げておりましたけれど）、口惜しくかく渡らせたまふこと（不甲斐無くもこのようにお移り為さいますとは）。殿は＊ことざまに思しなることおはしますとも（殿は異なる縁組をお考えになる事がお有りであっても）、さやうに思し＊なびかせたまふな（あなた様は然様に思い従いなさいませんように）」　＊「おなじきみ」は＜同じ身分のお方＞だろうが、「たのむ（期待する）」とあるからには＜結ばれる事＞を補語すべきなのだろう。　＊「異様」は注に＜「殿」は内大臣をさし、「ことざま」は夕霧以外との縁組をさす。＞とある。　＊殿に「なびかせたまふな（従いなさいますな）」とは、さすがに大宮邸の男君の御乳母である。社交に生きる上流夫人は接客が使命なので、幼君の実際の世話は乳母が行う。幼君にとって、乳母が感性上かつ生理的に実母となって圧倒的な影響力を持ち得るから、その選任は御家の重大事であり、身分や年回りや諸事情からその候補者は自ずから狭い範囲に絞られる。乳母は他の女房とは別格である。宰相の君は文字通りに類推すれば＜参議の縁者の御方＞だから多分、故殿の実妹か従妹あたりの血縁で、内大臣の叔母筋くらいには宛たるのだろう。そのくらいの身内でなければ先ずこの場に出て来れないし、さらに大宮と姫を前にして、殿の意向に逆らうような事が言える筈が無い。

　など、ささめき聞こゆれば（小声で申せば）、いよいよ恥づかしと思して（姫は自分の事がますます殊更に取り沙汰されていると気が引けて）、物ものたまはず（何も仰れません）。

「いで（まぁそんな）、むつかしきことな聞こえられそ（面倒な話など申しますな）。人の御宿世宿世（人それぞれの宿命は）、いと定めがたく（色々なのですから）」

　とのたまふ（と宮が仰る）。

「いでや（いいえ）、ものげなしとあなづりきこえさせたまふにはべるめりかし（殿は若君を大した者では無いと侮ってお思いなのに違いありません）。さりとも（今はそうでも）、げに、わが君（本当に私のお世話申したこの若君が）人に劣りきこえさせたまふと（人に劣る評判でいらっしゃるかどうかを）、聞こしめし合はせよ（どなたにでもお聞き合わせくださいませ）」

と（と宰相の君は）、なま心やましきままに言ふ（憤まん遣る方無く言います）。

冠者の君（学生の若君は）、物のうしろに入りゐて見たまふに（物陰に隠れてこの様子をご覧になっていらしたが）、人の咎めむも（見つかって女房にうるさく言われるのも）、よろしき時こそ苦しかりけれ（普段なら厭なので、堪えもしたが）、いと心細くて（姫に会えなくなるかと思えば、とても寂しくて）、涙おし拭ひつつおはするけしきを（涙を押し拭って御出でになる姿を）、御乳母（宰相の君が）、いと心苦しう見て（とても心苦しく思って）、宮にとかく聞こえたばかりて（宮をご説得申し上げて）、夕まぐれの人のまよひに（夕暮れに紛れて）、対面せさせたまへり（宮は二人を対面させなさいました）。

かたみにもの恥づかしく胸つぶれて（二人は互いにもの恥ずかしく胸が一杯になって）、物も言はで泣きたまふ（物も言わず泣きなさいます）。

「大臣の御心のいとつらければ（大臣のお考えがとても厳しいので）、さはれ（このまま）、思ひやみなむと思へど（思いを断ち切ろうかと思いますが）、恋しうおはせむこそわりなかるべけれ（恋しくてどうにもなりません）。などて（どうして）、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ（もっと会えそうな機会があった期間に）、よそに隔てつらむ（二条東院などという余所に離れて行っていたのだろう）」

とのたまふさまも（と仰る若君も）、いと若うあはれげなれば（とても純真で率直なので）、

「まろも（私も）、さこそはあらめ（同じ気持ちです）」

とのたまふ（と姫君も仰います）。

「恋しとは思しなむや（恋しくお思いでしょうか）」

とのたまへば（と若君が仰ると）、すこしうなづきたまふさまも（姫が少し頷きなさるのも）、幼げなり（初々しい）。

［第五段　乳母、夕霧の六位を蔑む］

御殿油参り（おほとなぶらまゐり、室内に明かりを灯して）、殿まかでたまふけはひ（殿が御所から退出していらっしゃる時分に）、*こちたく追ひののしる（仰々しく大声で大臣のお通りを告げる）御前駆の声に（おんさきのこゑに、先触れの供人の声に）、人びと（女房たちが）、

「そそや（さぁ、殿のお着きですよ）」など懼ぢ騒げば（などと慌ただしくお出迎えに整列すると）、いと恐ろしと思してわななきたまふ（お二人は大臣をとても怖がって震え為さる）。

さも騒がればと（若君はいっそ今の二人を大臣が目の当たりにして、もう大騒ぎになれば良いと）、ひたぶる心に（思い詰めて）、許しきこえたまはず（姫の手をお放し申しなさいません）。御

乳母参りてもとめたてまつるに（姫の乳母が姫をお探し申しに来て）、けしきを見て（この二人が寄り添う気配に気付いて）、

「あな（まぁ）、心づきなや（困ります）。げに（やはり）、宮知らせたまはぬことにはあらざりけり（宮はご存じない事では無かったのですね）」

と思ふに（と思えば）、いとつらく（実に情けなく）、

「いでや（何とまぁ）、憂かりける世かな（悲しい有様でしょう）。殿の思しのたまふことは（殿がお辛くお叱りになるのは）、さらにも聞こえず（申すまでもなく）、大納言殿にもいかに聞かせたまはむ（大納言家にもどうお思い申しなさいましょうや）。めでたくとも（若君は優れていても）、もののはじめの六位宿世よ（姫の初婚の相手が六位という御縁とは）」

と、つぶやくもほの聞こゆ（つぶやくのが二人にかすかに聞こえる）。ただこの屏風のうしろに尋ね来て（乳母は二人が身を寄せる屏風のすぐ後ろに遣って来て）、嘆くなりけり（そう嘆いたのです）。

男君（若君は）、「我をば位なしとて（私を無官だからと）、はしたなむるなりけり（軽んじているようだな）」と思すに（とお思いになると）、世の中恨めしければ（そんな世評に嫌気が差して）、あはれもすこしさむる心地して（恋心も少し冷める気分になり）、めざまし（興醒めです）。

「かれ聞きたまへ（あれをお聞きなさい）。

くれなゐの涙に深き袖の色を、浅緑にや言ひしをるべき　（和歌 21-04）

涙に紅く染まっても、私の袖は浅緑　（意訳 21-04）

*注に＜「浅緑」は六位の色。「紅」と「浅緑」の色彩の対比。＞とある。「くれなゐの涙」は「紅涙（こうるい）」の訓読み、と古語辞典にある。「紅涙」は＜血の涙。悲嘆にくれて流す涙。＞または＜女性の涙をたとえていう。＞と大辞泉にある。「言いしをる」は「言いし居る」と「言い萎る」の掛け言葉だろうか。「にや言いし居るべき」は＜（家人が主人筋の悪口を）言って居て良いものか→いつまでも言わせては置かないぞ、今に見ていろ＞みたいな若々しい負けん気が感じられる。しかし「萎る」は＜しぼませる、気落ちさせる＞で、「にや言ひ萎るべき」は＜と言って萎れさせる気なのか＞となり、少し怨念付く。何れにしてもこの詠み方は直情的で、作者による若君の「若さ」の表現は良く出ているように思う。

恥づかし（情けない）」

とのたまへば（と若君が仰ると）、

「いろいろに身の憂きほどの知らるるは、いかに染めける中の衣ぞ」（和歌 21-05）

「仮に身なりが粗末でも、服に恋したわけじゃない」（意訳 21-05）

*注に＜雲居雁の返歌。夕霧の「紅」「浅緑」や「袖」の語句を受けて「色々」「染め」「衣」の語句を詠み込んで返した。＞とある。「身」は＜姿＞と＜立場＞。「うきほど」は＜形容詞「憂し(せつない気持ち)」の様相＞と＜動詞「浮く(見映え)」の具合＞。「そむ」は＜初む(始める)＞と＜染む(染める)＞。「なかのころも」は下着と上着の中の＜内着＞のことだが、多くは歌で＜男女の間柄＞の意、と古語辞典にある。この歌の表意は着物の色に因んだ贈歌を受けて、＜同じ色の上着でも袿(うちき)の染め色によって襲(かさね)の色目が違って見映え具合が色々に変わる＞という、意味よりは言い回しの面白さ。で、複意というか本意は＜色々と立場の違いで辛い思いをしても好きになった気持ちは変わらない＞と泣かせる。「衣ぞ」で＜変わる＞と＜変わらない＞の両方を言い表す高度な技巧、というか日本語の妙。だと思う、多分。

と(と姫君が)、物のたまひ果てぬに(言い終えた余韻も無い内に)、殿入りたまへば(殿が姫を迎えに入っていらしたので)、わりなくて渡りたまひぬ(姫は自分の部屋に戻りなさいました)。

男君は(若君は)、立ちとまりたる心地も(取り残された気持ちも)、いと人悪く(何とも格好が付かず)、胸ふたがりて(気落ちして)、わが御方に臥したまひぬ(自分の部屋に臥せってしまいなさいました)。

御車三つばかりにて(御車は三輛だけで)、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも(ひっそりと急いで出て行きなさる一行の気配が聞こえるのも)、静心なければ(気が気でないので)、宮の御前より(宮の御座所から)、「参りたまへ(此方へ御出でなさい)」とあれど(と遣いの女房が来ても)、寝たるやうにて動きもしたまはず(若君は寝ているように身動きなさいません)。

涙のみ止まらねば(そのまま涙だけは止まらずに)、嘆きあかして(泣き明かして)、霜のいと白きに急ぎ出でたまふ(霜が白く降りた薄暗いうちに急いで東院へお帰りなさいます)。うちはれたるまみも(泣き腫らした目も)、人に見えむが恥づかしきに(人に見られるのが恥ずかしいので)、宮はた(朝になれば大宮はまた)、召しまつはすべかめれば(お呼びになって側に控えさせなさるだろうから)、心やすき所にとて(気が休まる勉強部屋にと)、急ぎ出でたまふなりけり(急いで邸を後になさったのです)。

道のほど(帰りの車中で)、人やりならず(誰の所為とも無く)、心細く思ひ続くるに(心細く思い続けていると)、空のけしきもいたう雲りて(空模様もだいぶ曇って)、まだ暗かりけり(いつまでも暗いままでした)。

「霜氷うたてむすべる明けぐれの、空かきくらし降る涙かな」(和歌 21-06)

「張りつめた霜を踏むうちに、空はいよいよ涙雨」(意訳 21-06)